

# シラバス

## 選択講習

講座番号	3	講座名	古典教育に活かす中国文学及び日本語・日本文学研究の成果					
担当講師	開催地	時間数	日程	主な受講対象者	受講定員	講習形式	試験方法	
柳川 順子 石川 一 西本 寮子 菅原 範夫	広島キャンパス	12時間	平成21年7月30日～ 平成21年7月31日	中学校・高等学校 国語科教諭	30人	講義	筆記	
講座概要								
到達目標	日本の古典の特質と展開について体系的かつ具体的に理解している。							
<b>講義Ⅰ：白居易の詩の魅力—日中双方の視点から—（担当：柳川順子）</b> 中唐の文人、白居易の詩は、平安朝の人々にたいへん愛好されたが、その受容のあり方は必ずしも白居易文学の総体を過不足なく受け入れるものではなかった。この不一致に着目することは、日本文学の特質を相対的に捉えることへとつながるだろう。こうした視点から、白居易の詩を精読し、それを中国古典文学の伝統、及び唐代文学の新動向の上に位置づけた上で、日本人の捉えた白居易文学の魅力について考察する。								
<b>講義Ⅱ：和歌文学の実際と解釈の方法（担当：石川一）</b> 和歌における解釈とは、単に修辭的技法、歌枕探索などを駆使すれば達成できるというものではない。比較文学的方法などを含めた多方面の学術研究の進歩によって明らかになる点が少なくないからである。そこで、古今集撰者の漢詩漢文的教養を確認した上で、和歌解釈上の問題点を考察してゆく。また、解釈という行為に、果たして「方法論」といったものが確立できるのかを考察したい。								
<b>講義Ⅲ：王朝文学にみる教養基盤（担当：西本寮子）</b> 古典文学を読むためには漢詩文や和歌の知識が欠かせない。作者と読者が共有した教養基盤を知ることで作品に対する理解が深まる。この講義ではいくつかの作品を取り上げて具体的に考察を加える。まず、初期の例として竹取物語の想像力的一端を白氏文集に求める。ついで成熟期の例として源氏物語の高度な表現を分析し、枕草子世界にみられる知的な会話の背後にある知識の共有について考えてみたい。								
<b>講義Ⅳ：平仮名文化の草創（担当：菅原範夫）</b> 平仮名は成立当初消息など私的な場で使用されていたが、西暦900年ごろに文芸の世界で公に用いようとする運動が起こった。竹取物語、古今和歌集、土佐日記などがその実践例であり、和文が発達していく様子が見られる。同時に平仮名は古今和歌集の書写によって定着する。一方で、10世紀ごろから音韻は次々に変化して平仮名の表記と音韻との間にズレが生じ、仮名遣が生まれる。以上の和文の発達と仮名遣いについて、その特徴を述べる。								